

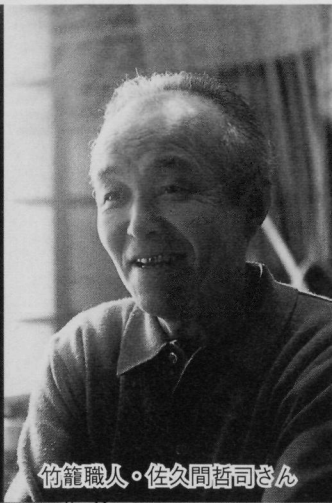
# Photo ふなばし

とくしゅう  
PART 1

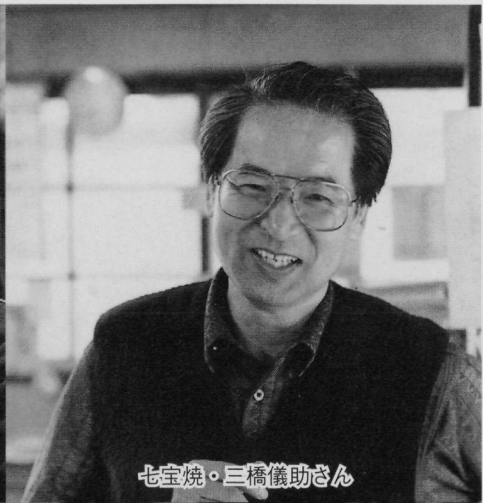
極める  
—  
技に生きる人々



和裁・齋藤とし子さん



竹籠職人・佐久間哲司さん



七宝焼・三橋儀助さん



装蹄師・福士修逸さん



袋物師・三代目 川村吉之助さん



和菓子職人・桑畑隆寛さん

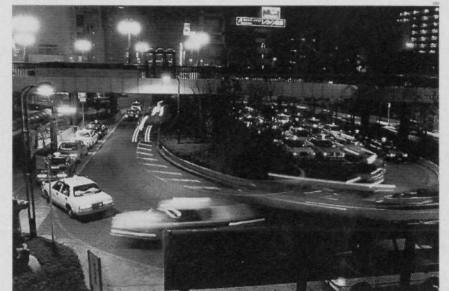


鍛冶職人・小松堅太郎さん

MOVE コミュニティー・福祉活動の拠点  
三山市民センターが間もなくオープン

とくしゅう  
PART 2

写真が描く光と影  
ふなばしの夜を見つめて



深夜の船橋駅北口タクシー乗り場

- 市政トピックス
- 街角ホットニュース
- サークル通信
- WE ARE IN FUNABASHI

まちなかの文化財／ふなばしの民話  
市民ひとことインタビュー

vol. 84

広報ふなばし写真版

MOVE

# コミュニティ・福祉活動の拠点 三山市民センターが

# 間もなくオープン



「福祉のまちづくり環境整備指針」を適用し、階段や通路に手すりを設け、廊下の幅を広くするなど、高齢者や障害を持つ皆さんに

様々な配慮がされています



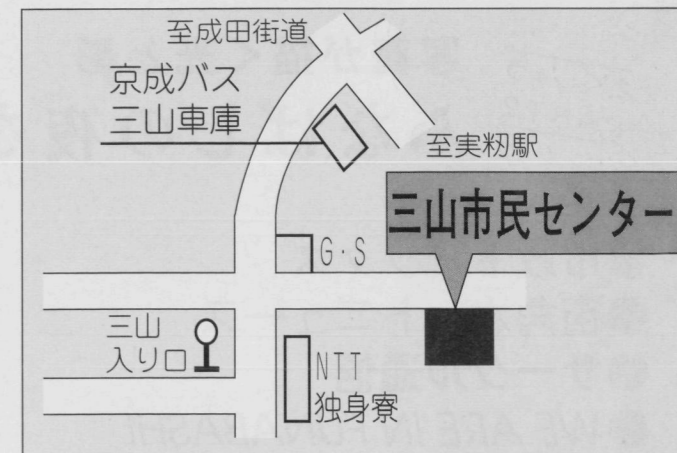
2月7日、市民センターの見学会が行われ、150人の皆さんが参加しました

三山市民センターが、いよいよ4月20日にオープンします。この施設は、市が設置する初めての市民センターです。

1階のコミュニティールームは、町会・自治会や福祉推進団体、各種サークルなどの活動の拠点。地域の皆さんの自主的な運営で、生活と福祉に役立つ様々な事業が進められます。また、調理室、図書コーナーが設置されているほか、三山連絡所が移転します。

2階には、音楽会やダンスなどに利用できる多目的ルームや和室、会議室、視聴覚室、音楽室、軽運動コーナーがあり、3階（屋上）に運動広場が設置されています。

さらに、受水槽に約1,100人の3日分の飲料水を貯えるなど、災害対策施設としての役割も併せもっています。



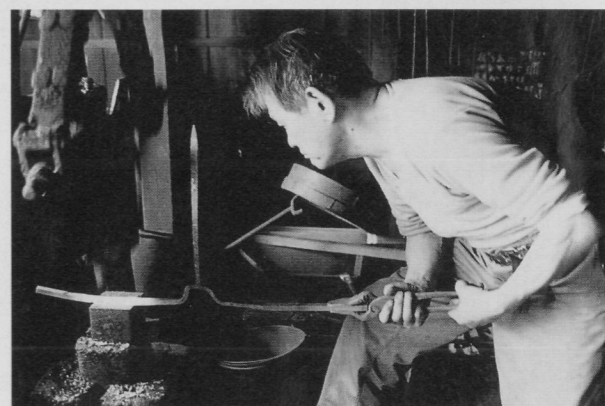
所在地：船橋市三山8-19-1 ☎0474-73-3100

※この施設は、平成9年度宝くじの助成を受けて建設されたものです。

極める — 技に生きる人々 —



真っ赤に焼かれた鉄が、小松さんの思うとおりに曲がっていく



「スプリングハンマー」というこの機械ができるまでは、3人がかりで仕事をしていたこともあったそうだ

首都圏の中核都市に発展した私たちのまち船橋市。その中で、先人たちが築いてきた「技」を受け継ぎ、守り続けている人々がいます。また、一つの「技」を極めるため、長い間取り組み続けている人々もいます。今回の特集では、そのような「技に生きる人々」を紹介いたします。

鍛冶職人

小松堅太郎さん 72歳 (宮本6)

真っ赤に焼かれた鉄を金鉄で挟んで金槌を打つ。固い鉄が見事な曲線を描き、だんだんと姿を変えていく。

「継ぎたくはなかつたんだけど、親がやれって言うもんだからね」。小松さんが父親のあとを継いで51年になる。太い腕とつやのある肌、そして鋭い眼光はとも72歳には見えな

い。小松さんが作っている鎌や万能などの農具は、金物屋に卸すのではなく、直接、農家の方が買いくる。「お客の住んでいる土地によって耕す深さが違うんだ。だから、その土地にあわせて鎌の角度や大きさを変えるんだ」と、力強く金槌を降りおろしながら答えてくれた。

農具が良く切れるか、切れないかは、角度が肝心。お客から良く切れるよと言われるのが一番嬉しいと言っ。昔は、とても忙しくて、朝5時から働いていたが、最近は農業の機械化が進んで仕事がだいぶ減ったそうだ。だが、長年、小松さんの鎌を使っているお客さんが、それを直して来てくれるのは、とてもありがたいと目を細めてくれた。



コークスで焼かれた鉄は、1,200~1,500度にもなる



川村さんが作り上げた、和装、洋装のハンドバッグ

袋物師の中で、明治7年に日本で最も早くハンドバッグを手掛けたのが初代吉之助だった。

川村さんは、小学3年生のころから二代目である父の仕事を手伝い、高校卒業時には、型紙さえあればすべて作れるようになっていた。「一日中あぐらをかいての作業は、本当につらい仕事でしたが、得意先の信用を得ようと一生懸命でしたね」

「先代の技を守るのは、三代目の私の役目です」と、力強く語る川村さん。作り上げるバッグは、すべて三代目吉之助こだわりの作品である。仕入れからデザイン、制作まで一人でこなし、その出来映えは、皇室にも愛用されるほど。

「めったにない極上の佐賀錦(生地)が手に入ったとき、袋物師としての喜びを感じます」。そんな言葉から、かたくなな職人気質が感じられた。



鮮やかなブローチの数々。ほかにペンダントやイヤリング、プレスレットなども作り出される

七宝焼

三橋儀助さん 58歳 (海神2)

「釉薬を何度も重ねて焼くと、きれいで深みのある色が出るんですよ」。七宝焼のブローチを前に三橋さんは語った。

父親は、装飾用の鎖をつくる飾り職人だった。しかし、三橋さんが受け継いだ家業は、昭和46年のドルショックで大打撃を受けた。そこで、鎖に何か装飾物をつけて売れないかと考えた。プラスチックや石などで試行錯誤を繰り返して、やっと七宝焼にたどり着いた。「七宝焼は、全くの独学です。最初は、色がきれいにしないで失敗ばかりでした」。しかし、独自のデザイン、手作りこだわった作品は、今では全国のデパートなどで販売されている。

「まちで何十年も前の自分の作品に出会うことがあります。恥ずかしいけれど大変うれしいものです」。三橋さんの技は、さらに磨きがかかり、作り出される七宝焼の美しさも、さらに輝きを増すようになった。

袋物師

三代目 川村吉之助さん 60歳 (宮本4)



「女性の靴の爪先や車のデザインが、新しいバッグのヒントになることもあります」



真剣な表情で釉薬を塗る三橋さん

